

## 謝 辞

1997年以降、創価学会版「法華経写本シリーズ」として世に送り出された刊本および写真版は、国内はもとより世界の大学、研究機関、専門家から高い評価をいただいている。このシリーズは、シリーズ1『旅順博物館所蔵梵文法華経断簡——写真版及びローマ字版』(1997年5月3日発行)を嚆矢として、6件8冊が刊行され、シリーズ6『ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部所蔵西夏文「妙法蓮華経」写真版(鳩摩羅什訳対照)』(2005年3月25日発行)がその掉尾を飾った。

筆者は、故戸田宏文博士(徳島大学名誉教授)の指導のもとで、シリーズ5『東京大学総合図書館所蔵梵文法華経写本(No. 414)——ローマ字版』(2003年11月25日発行)を送り出した。そこでは、「ネパール系諸写本のグループ分け」という、戸田博士の最終的な研究テーマを「付録I 梵文法華経写本研究略史覚書」において論考した。この課題は、論考のみに終始するものではなく、長期的展望のもとに研究され、持続的なテキストの刊行が実現されてはじめて実を結ぶものである。

ゆえに筆者は、「法華経写本シリーズ」の続編として、せめて「英国・アイルランド王立アジア協会所蔵写本」のローマ字版だけでも出版できれば、との思いを懐き、この写本のローマ字原稿の準備を進めていた。これは、「T8の次はRとP3」という、戸田博士の期待でもあった。

2005年3月下旬、校正をすませた原稿を東洋哲学研究所に提出し、森田康夫代表理事(当時)と川田所長に出版実現のお願いをした。東洋哲学研究所および創価学会は、筆者の要請をきわめて好意的に、建設的に検討され、当初の期待をはるかに凌ぐ規模で第二期の出版計画が2006年秋に正式に承認された。その内容は、2006年度から5年間で

①英国・アイルランド王立アジア協会所蔵写本No. 6——ローマ字版

②パリ・アジア協会所蔵写本No. 2——ローマ字版

③大英図書館所蔵写本Or. 2204——写真版

④大英図書館所蔵写本Or. 2204——ローマ字版

⑤ケンブリッジ大学図書館所蔵写本Add. 1684——ローマ字版

を出版するという、中期展望に立脚したものであった。

このプロジェクトには、ネパール系梵文法華經写本の研究にとって逸することのできない写本が網羅されている。すなわち、①は、いわゆる「ケルン・南條本」の底本に採用された写本であり、②は、ビュルヌフの仏語訳の底本であり、③④は、ネパール系貝葉写本のひとつのグループの読みを代表する写本であり、⑤は、「ケルン・南條本」の校合とケルンの英語訳に使用された写本である。

今回のプロジェクトの最大の眼目は、ネパール系貝葉写本・紙写本のグループ分けを可能な限り具体的に明確にすることである。これによって、「ネパール系梵文法華經校訂本」ともいうべきテキスト作成への長期展望が開けることになる。これは、戸田博士が生前懐かれていた独創的な構想であり、それをローマ字テキストという具体的な形態で、日本のみならず世界の研究者に発信できることは、筆者にとって大きな感激であり喜びである。

本書の出版は、多くの方々の温かいご理解と支援によって実現した。まず、誰よりも、筆者が人生の師と仰ぐ創価学会インタナショナル会長池田大作先生に尽きせぬ感謝の念を捧げます。秋谷栄之助創価学会前会長、原田稔創価学会会長ならびに関係部局の皆様、東洋哲学研究所の森田康夫前代表理事、川田所長(現・代表理事兼任)、井戸川行人事務局長ならびに職員の皆様、編集・渉外など全般にわたり協力してくださった創価学会国際室の水船教義氏(同研究所委嘱研究員)に深く感謝いたします。

そして、この写本のローマ字本の出版を快諾された、英国・アイルランド王立アジア協会のアリソン・オオタ学芸部長、キャシー・レイゼンバット図書部長に敬意を込めてお礼を申し上げます。次に、この写本の鮮明なコピーを提供していただいた、創価大学国際仏教学高等研究所辛嶋静志教授、工藤順之助教授に、これまで判読が困難であった文字を正確に判読することが可能となり、その成果を本書に反映できたことをご報告し、謝意を表したいと思います。また、英文の校正を担当していただいたディラン・スカダー氏に心より感謝いたします。

最後に、故戸田宏文博士のご霊前に本書を捧げ、新プロジェクト始動のご報告をいたします。

(戸田宏文先生の学恩を偲びつつ、ご逝去の翌年の2004年4月、福岡県筑紫野市のご自宅からの帰路に詠む)

誓い戸の 田に散る桜 ひろわんと  
法華の文に 寿量(いのちはか)りて

2007年2月11日 京都

東洋哲学研究所委嘱研究員

小槻 晴明